『とりかへばや』論

――きょうだいの「とりかへ」を中心に――

井上聖子

目次

はじめに
第一章　「とりかへばや」という語について
一、冒頭部「人しれぬ御心のうちの物思はしさ」について
二、きょうだいの呼称の「とりかへ」
三、父左大臣の「とりかへばや」
第二章　父左大臣と「家」
一、「いま少し言ひ所あること」について
二、天皇家に望まれるきょうだい
三、入内することの意味
第三章　宰相中将と女春宮
一、女春宮ときょうだい
二、宰相中将ときょうだい（一）
三、宰相中将ときょうだい（二）
四、宰相中将と女春宮の違い
第四章　きょうだいの「とりかへ」について
一、「とりもたがへ」られるきょうだい
二、「代はり」合うきょうだい
おわりに
注
参考文献

はじめに

まず、『とりかへばや』についての先行研究を簡単に紹介する。その中でも、辛島正雄氏と神田龍身氏の論文に注目し、特に「とりかへ」についてきょうだい間に落差を見る辛島氏の説ではなく、きょうだいは「二人一組」であるとする神田氏の説を支持する。

本稿は、きょうだいが限りなく同一に近い存在と認めた上で、きょうだいの関係がいかなるものかという点と、周囲がきょうだいをどのように捉えているかという点について考察する。そして、きょうだいを「とりかへ」るという題材が、この物語に何をもたらしたのかを明らかにしようとするものである。

第一章　「とりかへばや」という語について

一、冒頭部「人しれぬ御心のうちの物思はしさ」について

「とりかへばや」という語に注目するにあたって、まず物語冒頭に見える「人しれぬ御心のうちの物思はしさ」という表現について考察する。この「人しれぬ御心のうちの物思はしさ」という父左大臣の心境は、物語に起こるあらゆる出来事の根元を示唆し、また一度目の「とりかへばや」という願望と呼応している。しかも、「人しれぬ御心のうちの物思はしさ」と「御心のうち」の「とりかへばや」とが、きょうだいの「いとめづらかなる」様子を挟み込むように現れることから、一度目の「とりかへばや」という語は、「人し

れぬ御心のうちの物思はしさ」が秘密として生成され始めたことを示していると考える。

二、きょうだいの呼称の「とりかへ」

きょうだいの呼称が、「君だちをも、今はやがて聞こえつけて、若君、姫君とぞ聞こゆなる。」と「とりかへ」られることに注目するとともに、父左大臣がきょうだいの出家について考える際に用いる「尼」「法師」という語から、きょうだいの性別に関する父左大臣の認識の揺らぎを読みとる。

三、父左大臣の「とりかへばや」

きょうだいの性別に対する父左大臣の認識が揺らぐのは、きょうだいを〈男〉と〈女〉のセットとして捉えているからではないかと考えられる。そこで、二度目の「とりかへばや」に注目し、父左大臣がきょうだいのそれぞれを個として捉えておらず、あくまでも〈男〉と〈女〉という一組として扱っていることを確認する。

第二章　父左大臣と「家」

一、「いま少し言ひ所あること」について

諸注釈書で解釈の分かれる箇所である「いま少し言ひ所あること」について考察する。本稿では、この「言ひ所」とは父左大臣のそれと解釈する。そしてそこに、子の意思を尊重しようとする父親の建て前と、子に期待する父親の本音との狭間に生じる葛藤を見出す。

二、天皇家に望まれるきょうだい

男君が帝と春宮に入内を望まれたことと、女君が女春宮の婿にと望まれたことについての父左大臣の心境から、父がきょうだいに期待していた内実が天皇家とのつながりであると考える。

三、入内することの意味

物語において、天皇家は後継者の不在という問題を抱えていた。そのような天皇家に入内を望まれるということは、男皇子の出産が期待されていると考えられる。しかし、入内を嘱望されている〈娘〉は、実際には身体的に男性である男君であり、そもそも入内することは不可能である。にもかかわらず、父左大臣は男君の将来に「后」という地位を夢見る。そのようなねじれた願望に冒されてしまうほど、父左大臣は自分の〈娘〉の入内に賭けていたことになる。また同時に、父左大臣は兄弟を個別化することなく、あくまでも〈男〉と〈女〉の一対としてしか捉えていないことが改めて明らかになる。

第三章　宰相中将と女春宮

一、女春宮ときょうだい

女春宮は、〈女〉としての男君と〈男〉としての男君の両方だけではなく、〈女〉としての女君も、さらにはおそらく〈男〉としての女君をも目にしたことのある人物である。また、男君と肉体関係を持ち、きょうだいの「とりかへ」の秘密の真相を告白される人物でもある。このように、きょうだいを個別化し、真相を知ることによって、女春宮は物語社会から退くこととなったと考える。

二、宰相中将ときょうだい（一）

三、宰相中将ときょうだい（二）

宰相中将も女春宮と同じく、〈男〉としての女君と〈女〉としての女君、そして〈女〉としての男君と〈男〉としての男君のいずれをも知っており、さらに女君と肉体関係を持つ。この宰相中将がきょうだいをどのように捉えていたかを、きょうだいの「とりかへ」前後の心境に注目して考察する。宰相中将は四の君と男君に思いを寄せており、四の君を手に入れてもなお男君への思いを断つことができなかった。しかし、女君を手に入れた後は、女君と並行して男君にも愛情を寄せることがなくなる。このことから、宰相中将は恋愛の対象としては、女君と男君とを同一視していたと考えられる。

四、宰相中将と女春宮の違い

女春宮はきょうだいを個別化したことによって、きょうだいの「とりかへ」の真相を告白され、物語社会から退場することとなった。それとは対照的に、宰相中将はきょうだいを個別化することはなく、きょうだいの秘密に限りなく近づきながらも、性別の「規範」を内面化しているきょうだいの「とりかへ」に気づかず、また真相を告白されることもなかったために、物語末尾でひとり、女君の行方を思い嘆くことになったと言えるのではないか。

第四章　きょうだいの「とりかへ」について

一、「とりもたがへ」られるきょうだい

きょうだいは「とりもたがへ」られるほどに瓜二つであるという物語の設定に注目しつつ、『とりかへばや』のきょうだいの交換は一度きりであったことを述べる。

二、「代はり」合うきょうだい

きょうだいは自身らも互いに交換可能な存在であると考え、交換を実践する。それは、きょうだいが身体的性別によって期待される役割を獲得するために、これまでのそれぞれの人生を交換しなければならなかったとも言える。しかし、そもそもなぜきょうだいは自身のアイデンティティを放棄してまで、身体的性別にもとづく役割を引き受けなければならなかったのか。

きょうだいは、身体的性別と姿や役割としての性別との不一致によって周囲を翻弄してきた。だが、実はきょうだいがこのような状態で存在することは、きょうだい自身をも翻弄し続けることであっ

たと考えられる。つまり、父左大臣の期待、あるいは宰相中将が女君を女姿にしたことから分かるように、この物語の社会は性別における「規範」という圧力を人々にかけ、そしてきょうだいもまたそれに強迫され続けていたのである。

おわりに

『とりかへばや』という物語は、きょうだいの身体的性別以外の個性を認めず、あくまでも交換可能な存在と位置づけ、これを受け入れない存在（女春宮）は物語の外へと排除した。このように、きょうだいの個性を認めないということは、二人に向けられる愛を非常に曖昧なものにし、愛が仮構されたものでしかないことを示唆している。また、きょうだいは最終的にこれ以上ないほどの栄華を極めることになるが、このことは逆に、誰も身体的性別からは逃れられないということを強調しているのではないかと考える。

身体的性別は強迫観念のようなものであり、社会に身を置く人間は性別の「規範」のもとづく期待を有しており、知らぬ間にそうした期待を内面化してしまっているということを、この物語は皮肉まじりに語っているのではないだろうか。

宇治十帖という物語社会の論理

——『源氏物語』宇治十帖の「物語社会—学」的研究

岩田行展

目次

○、はじめに
一、「世づかぬ」女たち
1　正篇における「世づかぬ」—若紫、末摘花の場合
2　宇治十帖における「世づかぬ」—大君、中君の場合
3　「世づかぬ」浮舟
二、「世づかぬ」行為としての「足をさし下ろす」こと
1　玉鬘の足—歩く足／歩けない足
2　変容する周囲の足
3　浮舟の足—歩けない足／さまよう足
三、生き方としての「世づかぬ」

『源氏物語』研究史において「宇治十帖」は、いわゆる光源氏の物語である〈正篇〉に対して、光源氏亡き後の物語＝〈続篇〉と位置付けられてきた。この〈続篇〉ということばが端的に示すように、続きの物語として、〈正篇〉に付属しているものとして扱われてきたと思われる。

たとえば、葛綿正一によって提出された宇治十帖研究史に対する